

## 折口信夫の造形伝承論

小川 直之 (國學院大學折口博士記念古代研究所)

### キーワード

折口信夫、造形伝承、澁澤敬三、民俗学、民具研究

### 1. 折口信夫と澁澤敬三

この2人がどのような経緯をもって出会い、どのような交流をもったのか、今後調べてみなければならないが、澁澤敬三は『折口信夫全集』の月報第30号(昭和32年3月)に「なつかしい折口さん」という一文を寄せている。「折口さんについて私が先ず思い出すのは花祭のことです」という言から始まり、「特に花祭に憑かれたようにこの山中を訪れ、更に信州の遠山や新野、又遠州の西浦等へ足をのぼし、当の早川さんをしのぐ程歩き廻つたのが折口さんであります。同時に折口さんも又澤山の人々をこの方面へ誘い込んだのでした。私も何回か御一緒致しました」と、折口と花祭とこれを伝える村で一緒に過ごしたことがあるという。さらに、「折口さんは私の主宰して居たアチックへもよく来られ、つつしみ深い挙措の中にもれる茶目気から、新蒐民具等を只見るばかりでなく、じかに身につけて喜んで居られました」と、折口は澁澤邸に置かれていたアチック・ミュージアムへも足を運んでいたことを述べている(澁澤 1957: 1-2)。

澁澤がいう花祭とその村で折口と一緒に過ごしたというのは、昭和5年(1930)1月の園村(東栄町)足込の花祭りである。「原田清日記」によれば、4日朝に、澁澤敬三、今和次郎、折口信夫らはすでに現地入りしていた早川孝太郎らの出迎えを受け、原田清宅に行き、原田宅で「信州山そば」などを食べている。この時に折口は、色紙2枚、短冊1枚に歌を書いているようだが、12時前には本郷に出て、大崎屋で中食をとった後、夕方から「足込長畑北原」の花祭を見学している。見学は翌5日まで続き、「清等澁澤、早川、折口氏等午后三時迄足込ノ花見物し」、夕方から大崎屋まで帰り、早川、折口、澁澤、宮本の4人が残って、原田清らと「民俗学談ニ耽ル」とある(刈田 2002: 36-39)。

2人は昭和5年1月4、5日とともに足込の花祭を見学し、5日の晩には早川孝太郎、宮本(勢助か馨太郎か<sup>1)</sup>)、原田清を交えながら民俗学談義を行っている。明治20年(1887)生まれで当時43歳の折口信夫、明治29年(1896)生まれで34歳の澁澤敬三、明治27年(1894)生まれで32歳の原田清、明治22年(1889)生まれで41歳の早川孝太郎らは、奥三

---

<sup>1</sup> この時には宮本勢助とその子息である馨太郎と一緒に現地に行っており、日記の記載は「宮本」だけなので、勢助なのか馨太郎なのかは不明。

河など天竜川流域の民俗や暮らしぶりなどについて、熱く語り合ったのではなかろうか<sup>2</sup>。

折口と澁澤は、これ以前から知己があったのか、それとも足込の花祭での出会いが所謂「松坂の一夜」となったのかは不明だが、折口が仙石原から澁澤に宛てた昭和5年(1930)4月1日の封緘はがきには、「先日来、度々失礼いたしました。おわびおわび。袖山君今日、松本から帰りましたよしの、そのあしで俄にこゝにまゐりました。さうして話を聞きますと、私のぐずぐずしてゐるうちに、急にかはつた事情がふつてわいてまゐつたのです」「御心いれの件、数年後にのぼしてやつて頂く外はない様な事になりました」「袖山君のため、こゝの処はからうてやりたいと存じます。いづれ御目のまへに、いろいろ」と書いている(折口1930b<1998: 137-138>)。この手紙は、後に澁澤邸に住み、アチック・ミュージアムで文庫や『アチック・マンズリー』の編集などに携わる教え子の袖山富吉(國學院大學高等師範部を昭和10年に卒業)を澁澤のもとに置いてもらうことを頼んでいたが、事情ができて、数年後にして欲しい旨を依頼するものである。昭和5年(1930)の春には、折口と澁澤との間にはこれだけの信頼関係ができていたのがわかる。澁澤は昭和8年(1933)9月に書いた「アチックの成長」(澁澤1933<1992: 13>)の中で、アチックの藤木喜久麿が柳田國男の委嘱で作成した東京府庁所蔵の近藤富蔵『八丈島実記』の謄写本1部を折口信夫に贈ったと述べているが、これは現在も國學院大學折口博士記念古代研究所に所蔵されている。

折口信夫といえば、国文学の研究や民俗学、なかでも日本人の精神世界への関心が強く、物質文化・民具への関心はなかったように思われがちだが、折口が昭和初期に澁澤とつながりを持ち、このように交流を深めていったのは、折口が提唱した文化理論あるいは文化研究の指標を検討すると、そこには物質文化を構成するモノから発想し、論理だてを行っている理論がいくつも存在しており、折口にはこうした思考性向があったからではないかと思う。折口は、柳田國男については『古代研究』民俗学篇2の「追ひ書き」や、戦後昭和22年刊の『民俗学新講』に「先生の学問」を寄せるなど、自分の研究と結び付けながら述べているのに対し、澁澤やアチック・ミュージアムについては寡黙だったといわざるを得ない。しかし、澁澤がいうように、折口がアチック・ミュージアムをよく訪ね、藁帽子を被っておもしろがり、澁澤やアチックの同人たちと一緒に写真に写っていることなどからは、約10歳若い澁澤を近くに感じていたように思える。

本稿の目的は、折口信夫がいう「造形伝承」論を検討するとともに、折口の文化理論構築にどのようにモノへの視点関わっているのか、その発想のあり方も含めて明らかにすることにある。それは今後の物質文化、民具研究の方法論的な検討に資するため、ここでは最初に澁澤らによる民具研究論について若干振り返って、その特色を述べ、その後で、折口の「造形伝承」論とモノからの発想を検討していく。

---

<sup>2</sup> 昭和6年(1931)7月には設楽民俗研究会の結成と雑誌『設楽』の発刊が始まっている。本郷町長をつとめる原田清は『設楽』創刊号で「廻り遠くても手間がとれても結局は郷土の研究に第一歩を置かねば吾々の生活は良くなって行く可能性がないことになるのではないでせうか」と述べている。こうした考え方と設楽民俗研究会の結成、雑誌『設楽』の発行という活動は、折口、澁澤らとの交流が無関係ではなかろう。

## 2. 澁澤敬三の民具研究論

戦後の高度経済成長によって日本人の生活様式、なかでも日常の暮らしを組み立てるためのモノのありようは大きく変化したといえよう。端的にいうなら、私たちの生活にはすでに自らが手作りした道具類は殆どないといえる。これがモノをめぐる現状であるが、アチック・ミュージアムでは昭和11年(1936)に『民具蒐集調査要目』を出版し、民具の蒐集と研究のための基準と分類を示し、この中で民具とは「我々同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」(アチック・ミュージアム 1936: 1) という定義を行った。この定義の文章をどう解釈するかについては、いく通りもがあるだろうが、素直に読んでいくなれば、「我々同胞が」は一人の個人がというのではなく、私たち日本人がとか、同じ地域で生活する人たちがという集団性を示している。「日常生活の必要から」というのは、説明するまでもなく生活をおくるために必要となるということである。判りにくいのが「技術的に作り出した」という表現で、わざわざ「技術的に」と言っていることである。「作り出した」という言い方には、当然ながら作るための技が含まれ、その技がなければ作ることはいわけて、この前に「技術的に」というのは、屋上に屋を重ねる表現となる。であるなら「技術的に」は「我々同胞が」自らの技で、と読むことになり、自らの技で作りに出した、つまり手づくりした身の回りの道具が民具であるという定義である。

こうした「民具」の概念をめぐる議論は、昭和50年(1975)11月に日本民具学会が設立された後の1980年代を中心に、「準民具」「在来民具・新民具」「伝統民具・流行民具」「自製民具・流通民具」など、さまざまな用語とともに「民具」概念の再検討が活発に行われている。このことについてはすでに検討を行ったことがあるのでここでは取り上げないが(小川 1991: 335-353)<sup>3</sup>、要は高度経済成長によって日常生活の中のモノのありようが大きく変化し、当時の民具研究は、アチック・ミュージアムによる民具概念では立ちゆかなくなっていたのであり、民具概念を拡大する方向で議論が進んでいたといえる。いうまでもなく民具研究というのは、庶民生活のなかに存在し、用いられるさまざまなモノの中から「民具」を発見、抽出して行う研究であるので、研究対象の「民具」が無前提に存在するわけではないからである。こうしたことは「民具」だけのことではなく、「民俗」「民芸」「民謡」「民家」「民俗芸能」などの術語も同じで、これらはいずれも、庶民生活のなかから特定の属性をもつ事柄やモノを発見、抽出し、これを研究対象として位置づけるための用語である。言い換えれば、これらの用語は生活や文化を認識し捉えるための視点であり、そこに生活や文化をめぐる哲学や思想が存在しているのは当然のことである。

生活のあり方が変化すれば、これら術語の概念や概念を構築する哲学や思想が変化していくのが当然であろうが、少なくとも「民具」という用語が術語として定立されようとしていた時代には、昭和11年(1936)の『民具蒐集調査要目』の民具概念で庶民生活の実態や歴史などが把握でき、対応できたと理解することができる。こうした時代に澁澤敬三は、民具研究のあり方、換言すれば民具研究の目的を「アチック根元記(二)」で次のように述べて

<sup>3</sup> 民具の概念など研究の方法論に関しては、直近では田辺悟『民具学の歴史と方法』(2014年12月、慶友社)でも取り上げられている。

いる。それはアチック・ミュージアムで足半研究が進む中で気づいたのは「民具研究は個体或は同一種の民具の研究より更に進んで異れる民具との比較研究に至り、茲に初めて我々と民具との交渉に関する重要な理法を見出し得ると云ふことであつた」のであり、そのためには次の7項目の研究が必要であるという（澁澤 1935: 1）。

- (一) 民具研究に際しては先づ第一に民具個体（同一種）の諸相を研究して其の根本的な特質を正確且十分に理解しなければならない。
- (二) 与られたる一つの民具は我々の特定の生活様式と自然的環境とに基き、その発生、持続、又は変化性に就て一定の基本的法則に支配されて居ると思はれるが之の法則の考究は第二に来るべき問題である。
- (三) 次いで如上の生活様式自然的環境及時間に従つて起る法則が異れる各種の民具間の関係に於て夫々分化作用異化作用又は同化作用を惹起して居ることは出来得る限り明瞭にしたい。
- (四) 変化そのものの性格に就いても一般的なものから特殊化された複雑なものへ自然的且つ系統的に変化する場合と偶発的且つ無機的に因子の附加さるゝ場合とに分ち注意研究することを要する。
- (五) 相異つた民具類に適用さるゝ類似現象を究め、同時に民具類の相互間に於いて各種の関係が成立するとして、此所に見出すべき幾多の概念を整理することに努める。
- (六) 民具個体の短き寿命と之を造出する我々の記憶及び技芸との関係、並に之に伴ふ幾多の誤差を考慮しつゝ概念として永き生命を有する民具を明瞭に把握すること。
- (七) 民具名称の発生変化分布に注意を要することは勿論であるが更に名称附与の根本的法則を把へることが出来れば幸である。

『アチック・マンズリー』第2号の巻頭に、1頁にも満たない短い文章で述べているので抽象度が高いが、(一)から(七)は(一)に「先づ第一に」、(二)に「第二に」ということから、研究課題の手順を念頭に置いているのがうかがえる。その上で、まずは個別民具がもつ根本的な特質を理解し、その民具を生活様式、自然環境と関連づけながら、その民具の発生、持続、変化を捉え、これらについての基本的法則を明らかにすること。そして、こうした法則が、他の民具類との関係性の上に、どのような分化、異化、同化を起こしているのかを明らかにすること。民具がどのように変化するのか、その傾向についても一般的な場合と特殊な場合とがあろうが、必然的に系統的な変化をする場合と、偶発的で単独的な変化の要因が存在する場合とがあるので、両者を見極めながら変化を捉えていくこと。(五)はなかなか理解が届かないが、これは(二)から(四)について別の民具で確認して類似現象の存在を見極め、関連する民具に存在する(二)から(四)を関連づけながら検討し、その関係の中に現れる概念(論理)を整理することであろうか。(六)は、民具は恒久物ではないので、いずれ壊れたり廃棄されたり、つくり替えられたりするので、これをつくる人たちの記憶と技芸との関係、つまり技術伝承のあり方を明確にするなかで、このようにつくるのだという記憶(言説と理念)と実際の技との誤差を考慮しつつ、概念として生き続ける民具を把握することと理解できる。最後の(七)は民具名称のことで、その発生、変化、分布に注

意し、名称付与の法則を把握することである。

この文章を執筆するにあたって澁澤は、各項とも具体的な事象があり、それをイメージしながら止揚していると思われる。当時、進展していた足半研究を振り返ることで、澁澤がイメージしている具体事象がとらえられるかわからないが、全体を見て言えるのは、民具の変化や技術伝承のあり方は民具研究の目的に加えてはいるが、民具研究によって庶民生活史の叙述を行うという目的は、この時点ではあまり考えていなかったように思える<sup>4</sup>。課題の力点は、生活や環境との関係性、さらに民具相互の関係性、これらの関係性のなかで起こる発生、持続、変化という時間軸上での民具存在の法則にあったといえよう。

この時代の澁澤の民具研究に関する考え方については、礒貝勇が「あしな研究のころ(一)」で述べている。これを読むことで、先の澁澤の7項目の課題は理解しやすくなる。礒貝は、澁澤の民具研究の課題は「ぼくたちはこのお話を先生の文化構造における分子構造式理論と大げさによんでいた」といい、澁澤の考えを紹介している。それは文化構造を有機化学の分子構造式にあてはめた説明で、エチルアルコールとメチルアルコールは、分子式は同じだが構造式が異なるように、文化というのは文化要素がどのように結合しているかが問題となる、という内容である(礒貝 1969: 1)。礒貝の言に従うなら澁澤の民具研究論は文化構造論的研究に主眼があったといえよう。

アチック・ミュージアム、後の日本常民文化研究所における民具研究については、たとえば日本における物質文化研究の方法についての学史的な検討も行っている祖父江孝夫・大給近達・中村俊亀智・大塚和義「物質文化研究の方法をめぐって」では、アチック・ミュージアムの背負梯子や足半の研究が顕著な成果をあげられなかったのは「その方法の中心は物質文化を構成するひとつひとつの要素についてその分布をたしかめ、その要素についての呼称や使用法、つまり要素についての伝承を全国共通の項目別に調査していくというやりかたを採用した点にあった」、そのため「作業的には文字通り項目別に分担してまとめていく方法がとられている」。結果、「これは要するに「型わけ」の仕事であって、その段階において追求を終えてしまっているのではないかと思われる点に大きな難点がある」と評している。組織的な文化研究、物質文化研究としては先見的であるが、これは柳田國男のもとで行われた「山村生活の研究」や「海村生活の研究」と同じく、断片主義的な研究であったというのである(祖父江他 1978: 293-294)。こうした評価からいうなら、先にあげた澁澤敬三の民具研究の課題をめぐると見通しは、アチック・ミュージアムの民具研究には十分に反映されず、成果をあげられなかったことになる。

しかし、澁澤が『アチック・マンスリー』第2号に「アチック根元記(二)」を書いてからは、昭和10年(1935)10月10日の同誌4号に高橋文太郎が「民具の研究」と題して、民具に付随する伝承調査の必要性を説いたり、同年11月20日の5号では山本二三丸が「民具に就て」で、民具の分類案を示したり、同年12月30日の6号では礒貝勇が「民具研究の方法」を書いたりしており、同誌35号までさまざまな議論が繰り広げられている(小川

<sup>4</sup> この時点でというのは、よく知られているように澁澤は、戦後には絵巻物を用いてここに描かれる民具や行為などを分析、叙述することを行っている。こうした研究は、まさに生活史の叙述であり、民具に対する歴史的な関心は強くもっている。

1991: 335-353)。こうした動向のなかで、実際の足半研究などでは、どうして要素主義的な研究になったのかなど、改めて研究史をたどってみる必要があるであろう。

「民具」の概念について宮本常一は、澁澤敬三や桜田勝徳らとの議論を踏まえて自分自身としてはということで7項目を基準にあげている。「二 民具は人間の手によって、あるいは道具を用いて作られたものであり、動力機械によって作られたものではない」、「五 民具は人間の手で動かせるものである」、「六 民具の素材になるものは草木、動物、石、金属、土などで原則としては化学製品は含まない」などの7つの基準である(宮本 1979: 76)。この宮本の民具定義は、高度経済成長期の日本人の生活が大きく変化変容する時代に行われており、ここでいうような民具の衰亡期にあったことからの思いかもしれないが、庶民生活の中のモノの文化のごく一部を「民具」とするという考え方で、宮本はこれを素材にして「根本問題は民具の形体学的な研究にとどまらず、民具の機能を通じて生産、生活に関する技術、ひいてはその生態学的研究にまで進むことに意味があると思う。生産、生活の技術、民具の生態学的な研究は、同時に人間の生態学的な研究にふかいつながりを持つものである」(宮本 1979: 11)という。さらに「民具の研究は民具と民具の持つ技術を通じて人間生活を構造的にとらえてゆこうとするのが最後のねらいになるのではなかろうか」(宮本 1979: 104)と研究目的をいい、また民具研究によって「民衆の日常生活と技術の発達を追求することができる」のであって、「私は民具を通じて文化発展の新しい見方を持ちたいと思っている。そして民具の形態の中に文化発展の様相をも見つけたい」(宮本 1979: 13)と、歴史的には発達史的な指向が強い。宮本の民具概念は、それがどのように作られたのかという製作論を基盤にし、その研究は、民具を自然と人間との関係性の中におくことによって人間生活を構造的に捉える一方、民具を近代の文明化のプロセスに位置づけたい、というように読み取れる。

こうした考え方に対して中村たかをは、民具を用具論的に捉えている。それがどのように作られたのかではなく、その使い途や使い方から捉えていくという見方である。中村は民具研究の目的としては、民具を通時代的な概念として捉えることでの民具史、民具変遷史の叙述と、民具を近代ないし近代を中心とする時代のものに限定し、近代から現代までの民具の様子をきめ細かく分析することの2つがあり、自分は後者の立場に立ちたいという(中村 1981: 10)。

民具研究の現状については、別途稿を起さなければならないが、近年の物質文化研究をあげておこなうなら、大西秀之は社会人類学の立場から、今まで行われてきた、人がモノをどのように認識するのか、あるいはどのように意味づけるのかという言説の分析をいかにして乗り越えるかを模索し、モノと人とが形づくる関係性の、非言語領域の検証を進めている(大西 2014)。また後藤明は、身体と道具の関連性をどのように捉え、理解していくのかに関する研究動向を、そこで示されている分析指標とともに論じている(後藤 2011: 201-218)。これらはいずれも民具学からの研究ではないが、ここで取り上げたのは、これらの研究は大きな枠組みとしては先にあげた澁澤敬三が示した民具研究の課題の(六)につながりをもつのではないかと思われるからである。このように判断すると、澁澤があげた7項目の課題は、まだまだ検討すべきことがありそうだとということである。いずれにしても民具研究などの物質文化論は、モノをどのように作るのか、あるいはどのように使うのかという技術論と、そのモノが「歴史」や「文化」「宗教」などのコンテクストのなかでどう位置づけら

れるのかという認識論のなかで進んでいるのが大勢ではなかろうか。

### 3. 折口信夫の民俗学

折口信夫の造形伝承論という本題に入る前に、昭和10年(1935)頃のアチック・ミュージアムや澁澤敬三の民具研究論などを取り上げたのは、折口は、ほぼ同じ時代である昭和9年(1934)に『日本文学大辞典』で「民俗学」を説明する中で「造形伝承」というカテゴリーを設けているからである。「先づ民間伝承を採訪し、組織するための便宜上、種目を立て、凡そこれを五つの部類に分けて置くことにする。即、週期伝承・階級伝承・造形伝承・行動伝承、並びに言語伝承がそれである」(折口 1934<1996: 162>)という。

折口は「便宜上」といいながらも、こうした民俗学研究の枠組みを提示するのは学問的な体系化をはかる意図に違いないが、これに先だって大正9年(1920)12月10日に國學院大學で行った特別講義「民間伝承学講義」では次のような分類案を述べている。項目の後に記す内容は、各項の説明で述べている内容である(折口 1971a: 25-39)。

精神伝承 民間宗教、宗教家の伝記、神ならびに布教者の奇跡、生き死にに関する考え、他界の考え、靈魂の問題、神社および寺院の問題、神社・寺院に付属した人と土地、講社、宮や寺と撰社・末社・塔頭との関係、叢祠、祭礼、妖怪、医療、物忌み

習慣伝承 一般の年中行事、冠・婚・葬・産のこと、獵師・漁夫の行事、百姓の行事、商人の行事、衣食住、階級に関する習慣的伝承、特殊民

言語伝承 民譚、民謡、童謡、呪文、神拝詞、祭りの囃し詞、諺、謎、隠語、洒落、舌もじり、あさな

表出伝承 自分自身の感情を表すときの固定した方法、遊戯、勝負事、子供の遊び

この講義を行う大正9年(1920)までに折口は、大正2・3年(1913・14)に「三郷巷談」、大正4年(1915)に「髯籠の話」「盆踊りと祭屋台と」、大正5年(1916)には「稻むらの陰にて」「異郷意識の進展」「依代から「だし」へ」など、大正7年(1918)には「幣束から旗さし物へ」「だいがくの研究」「愛護若」「まといの話」など、というように民俗学関係の論文を次々に発表しており、折口の言葉でいえば「民間伝承学」の全体像についての思索を重ねていたと思われる。

ここには「習慣伝承」に衣食住があっても、造形伝承や造形物に関する項目は設定されていない。そして、この後に示される民間伝承研究の枠組みが、大正11年(1922)に啓明会に出したという「民間伝承蒐集事項目安」(折口 1931<1996: 315-331>)で、その中項目までを抄出すると次のようになる。

- 一、信仰に関するもの
  - 1 国家的信仰 2 民間信仰 3 世界観念
  - 4 巫術・蠱術・妖術 5 神社と寺院と 6 叢祠其他 7 祭礼 8 妖怪
- 二、医療・禁厭
- 三、一般風習
  - 1 地方的一般年中行事 2 特殊年中行事 3 婚姻 4 誕生 5 葬儀

- 6 由来不明なるしきたり 7 社会的訓諭の文句 8 町村の交渉  
9 衣服 10 食物 11 住家・建築  
四、階級制度 1 親方と子方と 2 老若制度  
五、口碑・民譚  
六、言語・遊戯 1 方言 2 言語遊戯 3 遊戯  
七、民謡・民間芸術 1 労働謡 2 民間声楽  
八、童謡  
九、舞踏及び演芸  
十、演劇  
十一、影絵  
十二、ノゾキカラクリ  
十三、従業手工職人の余興演芸  
十四、右の外、地方地方の事情によって、特殊事項の加はるべきは勿論なり。

大正 11 年 (1922) の「民間伝承蒐集事項目安」にも「造形伝承」はないが、これは大正 9 年 (1920) の「民間伝承学講義」と、一、三は内容が近く、「民間伝承学講義」の内容を組み替えて「民間伝承蒐集事項目安」の一部に組み込んでいるのがうかがえる。ただし、これらの項目だてを昭和 2 年 (1927) 4 月刊のチャーロット・ソフィア・バーン編著・岡正雄訳『THE HANDBOOK OF FOLKLORE 英国民俗学協会公刊 民俗学概論』(岡書院)の目次と比べると、近似した構成となっており、折口の「民間伝承蒐集事項目安」は岡正雄による翻訳本が出版される前に、バーン編の『民俗学概論』を参照している可能性がある。『民俗学概論』の目次は次の通り(節以下は省略)である(バーン 1927: 1-5)。

- 序章 一 民間伝承 (Folk-lore) とは何か  
二 如何にして民間伝承を採集し且記録すべきか  
第一部 信仰と行為と  
第一章 土地と行為と 第二章 植物界 第三章 動物界  
第四章 人間 第五章 人造物 第六章 霊魂と他生と  
第七章 超人間的存在 第八章 予兆とト占と 第九章 呪術技法  
第十章 疾病と民間医術と  
第二部 慣習  
第十一章 社会的及び政治的の制度 第十二章 個人生活に於ける諸儀礼  
第十三章 生業と工業と 第十四章 暦、齋日及び祭礼  
第十五章 競技、運動及び遊戯  
第三部 説話 歌謡及び言慣し  
第十六章 説話 第十七章 歌謡と譚歌と 第十八章 諺と謎々と  
第十九章 諺語的韻語と地方的言慣しと  
附録 A 用語篇 B 問題篇 C 印欧民譚型表 D 引用文献

折口の「民間伝承蒐集事項目安」とバーン編著・岡正雄訳『民俗学概論』を比べると、両



者とも最初に信仰にかかわる部を置き、折口の「二、医療・禁厭」はバーン編著の第一部最後の第十章疾病と民間医術と重なる。折口の「三、一般風習」はバーン編著の「第二部慣習」、折口の「五、口碑・民譚」から「七、民謡・民間音楽」はバーン編著の「第三部説話歌謡及び言慣し」と近似しており、折口は、バーン編著『民俗学概論』の三部構成をもとに「民間伝承蒐集事項目安」を編成したように考えられる。折口の手元にあった昭和2年(1927)4月刊のバーン編著『民俗学概論』は訳者の岡正雄が折口に贈呈したものであるが、これには写真1に見るように折口による直筆の書き込みがある。上段書き込みの一番左には「歴史学問である民俗学」、一番右には心意→祈・禁・呪→とあって、最後は「造形」と記している、心意が展開して造形をつくるという着想を見ることができる。

大正9年(1920)の「民間伝承学講義」においても、折口の伝承分類は「精神伝承」「習慣伝承」「言語伝承」に「表出伝承」を加えた4部構成であるが、「表出伝承」という分類は後にはなく、これを除くと、精神、習慣、言語の3部となる。これもバーン編著『民俗学概論』の信仰・行為、慣習、言語という3部仕立てと近く、このあたりから『民俗学概論』の影響を受けている可能性も否定できない。バーン編著の『THE HANDBOOK OF FOLKLORE』のイギリスでの刊行は1914年(大正3年)である。

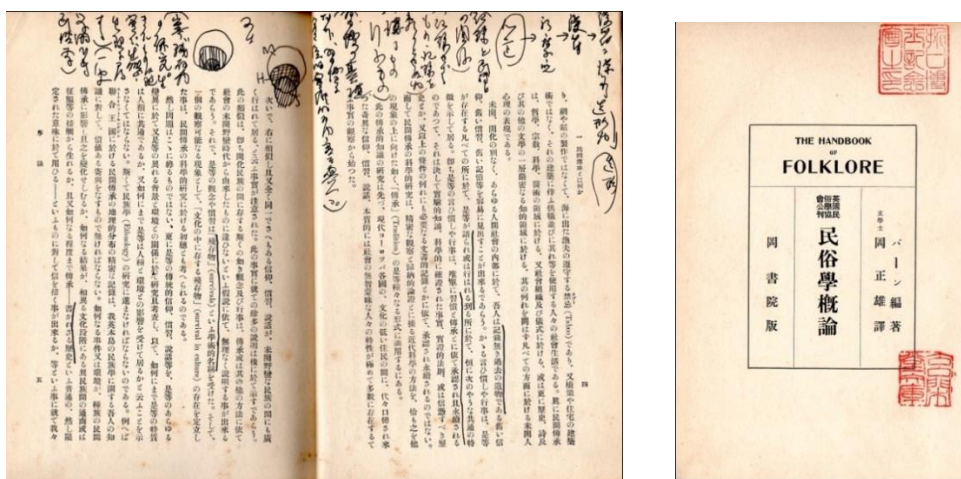


写真1 折口の書き込みがあるバーン編著『民俗学概論』

#### 4. 「造形伝承」の立項とその内容

折口が「造形伝承」の分類を設けるのは、前述のようにこの後、昭和9年(1934)の『日本文学大辞典』の「民俗学」である。その内容検討に入る前に、折口がいう「造形伝承」に対して第三者はどのように理解したのかを見ていくと、早川孝太郎は、昭和11年(1936)3月刊の『アチック・マンズリー』第9号に「一つの回顧」を書き、この中で「たしかはじめは民具に対して、私などは民俗品の語を使つて居た」ことをいい、民具をアチックで懸命に蒐集したことについて次のようにいう。

吾々民族の有つ生活伝統が、汎い意味の言語、行動に表はれた以外に、造形物に写し示された過程への探求であつた。折口博士なども、この微衷に賛意を与へられて何時だつたか年度はじめの相談会に、諸国の正月行事に關した削り掛とか、或は鉦、斧、鉞の

類の蒐集を提言された。現在のアチック収蔵中に、生々しい正月の削り掛が案外に多かつたり、貧弱ながらも、諸国の鉦、鉞が在るのも、斯うしたいきさつの結果もあつた。

民具の多くが経済生活に関係の物が多いこと、而も、それ等を通して、前代の精神生活へのつながりの強かつた事を、如実に識り得たのも、実は集めて後論へられた感があつた（早川 1936: 33）。

早川は、アチック・ミュージアムに正月のケヅリカケが多くあつたり、多くはないが鉦や鉞があつたりするのは、折口の提案<sup>5</sup>でこれらを集めたことを言い、また民具が前代の精神生活とのつながりがあることを知ったのも、民具を集めてみて判ったことだと言っている。早川は、折口とは近い人物であつたが、これは決してひいき目のことではなからうし、折口が言う「造形伝承」の考え方が、それなりの影響力をもったのがうかがえる。

折口は「民俗学」の中で「造形伝承」を次のように説明している。

造形伝承は、寧ろ、造形伝承物と言つた方が適切なのである。近来、その名称の民俗芸術に除外すべからざるものであるところから、右の一部門として加へられることになつたが、他の種目に入るもの、この記述からすれば、芸術的な部分と見るべきものとは、一致しない性質を持つてゐる。彼はすべて抽象的な存在であるにかゝらず、これは具象的なものである点である。而もあまりに具象的で、文学・芸術的なものに対して、技術の側から芸術的と思はれる外には、交渉がないとすら考へられる程である。併しこれと呼び更へて造形伝承といふと、如何にも所謂造形の民俗芸術が含むところの、他の民俗芸術との共通要素を思ひ得ることが出来る。信仰方面が殊に形式に固定した結果、原意を辿ることの出来なくなつたものが多い。それは、主として経済生活が、新しい目的を無限に展開して行つた為であつた。さうした二次的目的を持つやうになる前から、その以後の経済的利用の上まで、一つの繋りが見られる。即、信仰的な扱ひ方である（折口 1934<1996: 167-168>）。

ここで「近来、その名称の民俗芸術に除外すべからざるものであるところ」と言うのは、民俗藝能の会の雑誌『民俗藝術』第1巻11号（昭和3年11月）で特輯として「造型美術」を組み、今和次郎「上州と甲州の民家」、土橋長俊「自在鉤に就て」、木村幸一郎「東京近郊の土神像」などを載せ、同誌第2巻第1号（昭和4年1月）でも「造型美術採集図」として、吉田謙吉「正月の船」、今和次郎「信州諏訪中州村の道祖神」などを載せていること

---

<sup>5</sup> 早川がいう折口が鉦、斧、鉞の蒐集を提案したというのは、現時点では推測にしかすぎないが、この時期に折口は奥三河の花祭や新野の雪祭りなどに盛んに出かけていて、鬼の持ち物に鉞があること、また折口の「まれびと」論は、来訪する神である「まれびと」と在地の精霊との問答、「まれびと」による精霊の調伏が重要なことで、その発想は小正月の成木責めにあり、これには鉦や斧などが使われていることと関連があるように思われる。また、斧や鉞の刃には片面は3本、もう片面には4本の筋が引かれていて、この筋には呪的な説明伝承があり、こうしたことを知っていた上での提案かも知れない。

である。これらの記事は「造型美術」と言いながらも、モノとして造形の姿を図示し、その説明は民芸的でも、美術的な捉え方でもないが、折口は民俗藝術に抽象的な造形としての芸能と、具象的な造形としてのモノ（造形物）を考えているのである。モノは技術の面から芸術的ということができ、これを造形伝承という、芸能としての造形伝承との共通要素が考えられ、そこには信仰的な原意を辿ることができる。つまり、信仰的な意味をもった造形が、実生活上の経済的な利用を行うモノに取り込まれたというのである。

「民俗学」の「造形伝承」の説明では、その具体例として建築をあげ、これにはモノ、つまり住居としての造形伝承（技術）と家誉め・室寿の造形伝承（文学）があるし、胴衝き・木遣り・石挽き・踏鞴踏みは技術としての造形伝承というだけではなく、踊りや歌という芸能をつくりあげていることを指摘している。

「民俗学」の中での「造形伝承」の説明は短文で終わっているが、國學院大學郷土研究会の昭和12年(1937)5月27日の「民俗学とは何か」という講義では、「私は民俗に対して、いろいろな伝承に分けることを考えている。言語、行動、周期、階級、心意、造形の六伝承を考えている」(折口 1971b: 85)という。造形伝承を民俗学の一分野とすることは同じで、昭和12年(1937)11月11日には造形伝承の一つとして「かまどの話」をしていて、『折口信夫全集ノート編』第7巻では、これに続いて講義で扱われた「二 刀の話」「三 ほこ、やりの話」「四 枕の話」「五 「ろじ」と「つじ」と」「六 古墳の話」「七 門と垣と」「八 宮門の話」「九 「じょう」の話」を「造形伝承」としてまとめている。

これらのすべてをここで検討することはしないが、「一 かまどの話」を取り上げておくと、これは「造形伝承を今まで問題にしたことがなかったから、今度話してみたい。一つには、民間伝承が、すべて経済から始まって経済関係で終わるという見方が、正しいかどうかの検査の話にもなると思う。柳田先生や私は、フォークロアが経済をもって終始するとは思わない」で始まり、「かまど」について次のような例をあげている。順に列記すると①家は炉が中心で、これは火の神の祭壇で神聖なもので、煮炊きをしない炉もある。②家の火床が炉と「かまど」に二分した。③「かまど」には煮炊きに使わないかまど、時々使うかまど、いつも使うかまどの3種がある。④「かまど」は荒神の祭壇で、神聖な蓋が置かれ、ここに河童をまつところもある。⑤一つの屋敷を「かまど」と算える。⑥吉凶の場合は「かまど」を別にする。⑦奈良では大晦日から庭に「かまど」を設え、この「かまど」で煮炊きしたものを庭の蕨の上で食べた。⑧葬式には別の「かまど」で煮炊きをする場合と常の「かまど」で煮炊きをする場合がある。⑨葬式には、村中の者が葬家に行き、その家で煮炊きしたものを食べる習俗がある。⑩黄泉国の「へっつい」で炊いたものを食べると現世に帰れない。⑪葬式の別火は、村の家が増えていく系統が出来てからのこと。もとは一つの「かまど」から別れた家々で構成されていたので、葬家の「かまど」で煮炊きしたものを村人みんなが食べた。⑫沖縄には三つ石を並べた炉があり、神をまつためのものになっている。⑬次は「かまど」に関連して火を入れる火桶、すびつなどの話をする。

ほぼこれら13のことがらを関連させながら次々に述べているのである(折口 1976c: 395-481)。「かまど」そのものの形状は簡単な説明に留まり、多様な使われ方や「かまど」の意味付けについて各地の民俗情報・伝承事例をあげて説明するとともに、葬式時の「かまど」の別火については、村落社会の歴史的な推移と関連づけながら変遷を説くなど、多角的な把握を促すような説明をしているのである。

ここであげられている民俗情報・伝承事例の豊富さからは、折口の論述は、詩人的な想念とか、恣意的な思い込みと決めつけることは出来ないことが示唆されが、説明の最後には、次には火桶、すびつについて話すと、家の火所ということで連関するものを取り上げるといふ。こうしたところに折口独特の連鎖的思考、あるいは自身がいう「類化性能」<sup>6</sup>に基づく事象の連結という思考が現れているといえよう。このような思考に基づく理論構築には、現在の研究水準では適切とはいえないものも含まれているが、「類化性能」にもとづく論理構築は、いわゆる折口学の特色の一つといえる。

折口が民俗学の枠組みの一つとして設ける「造形伝承」は、『折口信夫全集ノート編』7に収められた國學院大學郷土研究会での講義では、昭和15年(1940)にも続いているが、和田正洲によれば、昭和14年(1939)の講義では、週期伝承、行事伝承、芸能伝承、言語伝承、行動伝承、心理伝承の6分類に改訂していたといふ(和田1984:7-8)。「造形伝承」という枠組みは前景にはない。昭和12年(1937)3月30日に愛知県教育会・民間伝承の会共催講演会で行った「国語と民俗学」という講演では、「民間伝承の種類を私が申す必要はないんですけども」としながらも、民俗学の枠組みの一つに「物を以てする伝承、物体伝承とでも名前をつけて置いてよろしいでせう」と、「物体伝承」という分類を示している(折口1938<1996:265>)。また、昭和13年(1938)9月から11月にかけて郷土研究会で行った「芸能伝承の話」の講義では、従来「民俗芸術」と言っていたことについては、芸術という場合は「民族」と言うべきで「民族芸術」が正しいと訂正している。「民族芸術」も「民俗」であるからというのが根拠である(折口1972:72-73)。このように昭和10年代前半の「造形伝承」などの折口の言説には、訂正や別の用語への置き換えなどがあって不安定な部分もあり、この時代に前景的に考えていた「造形伝承」「民俗芸術」には、折口のなかに概念の揺れがあったようである。

「造形伝承」ということでの折口の具体的な説明は、ここではこれだけに留めるが、やや注意すべきことは、『日本文学大辞典』の「民俗学」の項で具体例として取り上げた建築と、昭和12年(1937)11月に行った郷土研究会講義の造形伝承で最初に例示する「かまど」は、先にあげたバーン編著『民俗学概論』の附録にある「問題篇」には、「五 人工物」の項があり、その具体例に「住屋」「竈」「家具」「料理法及び其の他の家政」「呪術＝宗教的物具の製作」があげられている。この「問題篇」というのは、「観察者に依て採録される諸事項の一個の要略として役立てられたい」(バーン1927:21-23)とあるように、実地調査時の具体的内容案である。その例示の最初が「住屋」で、家の建築をめぐる諸儀礼や住居中の儀礼や俗信などが観察事項にあがっている。「竈」は「竈は祭祀又は儀式の対象であるかどうかを観察せよ」で観察事項が始まり、竈をめぐる信仰や俗信があがっている。『民俗学概

---

<sup>6</sup> 折口は『古代研究』民俗学篇第二(昭和5年6月、大岡山書店、『折口信夫全集』3所収)の巻末に、それまでの自伝的な文章ともいえる長文の「追ひ書き」を書き、その中で「比較能力にも、類化性能と、別化性能とがある。類似点を直観する傾向と、突嗟に差異点を感じざるものとのである。この二性能が、完全に融合してゐる事が理想だが、さうはゆくものではない。私には、この別化性能に、不足がある様である。類似は、すばやく認めるが、差異は、かつきり胸に来ない」と言っている。

論』の附録「問題篇」と造形伝承の具体的例示には、事項の一致があるわけだが、これは偶然の一致とは思えない。ここにもバーン編著『民俗学概論』からの影響が現れているのではなからうか。

## 5. 造形伝承・造形物からの発想

折口の教え子でもあった和田正洲が、すでに「一体に折口信夫の論文には造形伝承に関するもの、あるいは造形物が関係してくるものが多い。多分文学作品（国文学）、演劇等には、造形に関するものが多く出てくるので、民俗学を知る以前から関心が深かったのであろう」と指摘するように（和田 1984: 12）、折口の理論構築には造形物、造形伝承が重要な意味をもつ場合が多々みられる。そのすべてをあげることはしないが、造形物や造形伝承を核にして論理構築している典型例が、大正4年（1915）4・5月、同5年（1916）12月に雑誌『郷土研究』に発表する「髯籠の話」（折口 1915・16<1995: 176-202）である。この論文は「標山」と「依代」「招代」の基本的な論理の提示から始め、その論理は4つのステージをもって展開している。理論化の学史的な検討や論文自体の判釈、ここで示された理論に基づく研究などはすでに別稿（小川 2005: 361-392, 2014a: 349-368）で行っているので、ここでは造形伝承・造形物からの発想と、論理や理論の構築だけに限定して述べていく。

よく知られているようにこの論文は、日本人の神観念や信仰にとって重要な意味をもつ「標山」や「依代」「招代」の理論を提示したものである。この理論を構築するのに、第1ステージでは、まず『万葉集』巻3の「ちはやぶる神の社しなかりせば、春日の野辺に粟蒔かましを」という歌などから、神が天空から降臨する場所として「標山」を設けるという論理を立て、さらにこの「標山」には神降臨のための目印、つまり神からいえば「依代」、人間からいえば「招代」を設けるという神観念理論を示している。そして、「依代」は「標山」の喬木というのが元の姿で、これが後には人工の柱や旗竿に変化したと説く。さらに、神霊が依り憑くということでは、陰陽道の式神が依り憑く馬牛の偶像、盆の瓜・茄子の牛馬、神殿の鏡、仏壇の像や位牌、写真なども依代であるという。また、人間の髪・爪・衣服なども魂の宿るもので、魂呼びからは名前も同じような性格をもつとする。そして、「今少し進んだ場合では、神々の姿を偶像に作り、此を招代とするようになった」と、依代表象の進展を説明している。この偶像については、「直観的象徴風の肖像」から、仏像の渡来に影響されて具象化が行われたとする。

これはこの論文の最初の方で行っている「依代」の列記であるが、ここでは神霊の依り憑くモノということで、折口の類化性能、つまりアナロジー（analogy）によって同じ機能をもつモノがたぐり寄せられている。象徴的な偶像から具象的な偶像へという変化は、形象の変化を言っているわけで、歴史的な変遷も視野に入れているのがわかる。このように「依代」を論じた後に、この論文での重点ともいえる髯籠に移る。ここからが第2ステージで、生まれ故郷である木津の古老というダイガクの髯籠は「日の子」であるという伝承と、これを上から見たときの形象から、髯籠は太陽神を迎えるための「依代」とであると論じている。髯籠というモノを太陽神の依代というのは、一つには木津の「日の子」からの民間語原説（フォーク・エティモロジー folk-etymology）であり、もう一つは形象からのアナロジーによる見解といえよう。このアナロジーは、髯籠の籠を「日神」、髯を「後光」とするのであり、

同じ形象をもつ御会式の御祖師花（万灯）、左義長の飾り物、葬列の花籠、さらに近年のものであると、日の丸の竿先につける玉、端午節供の幟竿の先につける髻籠も同類のものであると、アナロジーによる解釈を進めている。

類化性能をさらに働かせ、第3ステージでは、髻籠と武蔵野一带の事八日の目籠を結びつけ、盆の切籠灯籠の幾何学的な構造は目籠の造形から展開したものであって、これは「全く髻籠の最観念化」されたものであると説明している。折口の説明の中ではモノの「観念化」という表現が重要で、これは元来の機能、この場合は神霊が依り憑く目印である「依代」という機能が、形を変えても埋め込まれて持続するという意味である。ここまでの論述で、依代の進化は、髻籠形式の籠から髻籠へ、これが目籠へと進んでから切籠灯籠になるというプロセスを示すのである。そして、これ以降が、やや時間を置いて後に発表した「依代から「だし」へ 髻籠の話の三」で、この部分から第4ステージへと進み、髻籠の籠の部分は、平安期には供物の容れ物となり、これが贈答の器へ転じていくというように、形象からのアナロジーは次々に広がっている。

このように折口は、神霊が依り憑くための目印という機能からのアナロジーと、髻籠という造形をもとにした形象からのアナロジーによって、「依代」「招代」を発見しながらその多様性を提示し、形象の「観念化」などによって進化していく道筋を示すことで依代理論を構築していくのである。それは時系列になかで、時間軸に沿って順に変化・変遷していくというような単純な論理ではなく、進化の各段階が共時的に存在するという文化様態を示しているのである（笹原 2014: 67-93）<sup>7</sup>。

こうしたアナロジカルな思考は、折口学の特質の一つでもあるが、折口の造形伝承・造形物からの論理構築についてももう少しあげると、大正15年（1926）講演の「はちまきの話」では、「現在の事物の用途が、昔から全く変らなかつた、と考へるのは、大きな間違いである。用途が分化すれば、随つて、其意味もだんだん変化して来る」、その例として「はちまき」は都合がいいという。この論文では、はちまき、手拭い、かつら、かづらを結びつけながら、これは「物忌みのしるしであり、神に仕える清浄潔白な身であることを示す」ものであると説明する（折口 1930a<1995: 19-26>）。そして、これらを機能からのアナロジーによって烏帽子、帯へとつなげている。また、「まれびと」論を説く「国文学の発生（第三稿）」（折口 1929a<1995: 11-66>）では「簑笠の信仰」の項を設け、ここでは「簑笠」姿が何を意味しているのか、「簑笠」姿が現れる場面をアナロジカル（analogical）に抽出し、その姿は「遠い国から旅をして来る神なるが故に、風雨・潮水を凌ぐ為の約束的の服装だと考へられ、それから簑笠を神のしるしとする様になり、此を著ることが神格を得る所

<sup>7</sup> 笹原亮二は参考文献に示す最近の論文で折口信夫の造形伝承論、「髻籠の話」などを取り上げ、「折口の造形伝承の視角は、依代の造形とそれに関わる人々の信仰や感性や経済性など様々な面において生じた変化に焦点化していた折口の依代論に通じる」ものであり、「ハレのかたち」の研究に有効な視点であるという。「対象を、それが依存している現実の様々な文脈から切り離すことなく、変化が連続する歴史的な過程において捕捉する折口信夫の造形伝承の視角の有効性が改めて注目される」とも指摘するが、こうした事象の把握は造形伝承に限らず、日本の文学史や芸能史などの叙述にも見られることであること、また「変化が連続する歴史的な過程において捕捉する」というのは、間違えとはいえないが、折口の昭和初期までの研究には進化論的な思考が強く、もう一歩踏み込んだ分析が必要である。この意味において笹原の指摘は、折口論としては従前の枠にとどまっている。

以だと思ふ様になつたのである」という見解を導き出している。蓑笠については、スサノヲの青草を束ねた蓑にも結びつけるが、「鬼」の衣装として考えるようになるなど、見解を拡大していく。

## 6. 造形伝承・造形物への関心

折口学にみられる造形伝承・造形物へのアナロジカルな思考を前景化しようとするれば、まだ多くをあげることができる。また、造形や造形物の名称に対するフォーク・エティモロジカルな理解をもとにした論理や理論の構築も、たとえば「行器」から「ほかひびと」、「裳」から「喪（服喪）」など、いくつもあげられる。こうした意味では、折口は造形や造形物に注視しながら文化研究を進めたといえるのであり、このような学問的性向は、前述のように和田正洲は「多分文学作品（国文学）、演劇等には、造形に関するものが多く出てくるので、民俗学を知る以前から関心が深かったのであろう」（和田 1984: 12）というが、具体的には折口が残したフィールドワーク記録からもうかがえる。本稿では最後に、このことに触れておきたい。

折口信夫の民俗学のフィールドワークについてはすでに別稿で述べたが（小川 2014b: 199-211）、それは大正2年（1913）12月『郷土研究』1巻12号から大正7年（1918）年10月『土俗と伝説』1巻3号に、都合5回にわたって大阪の巷間に存在する伝承を「三郷巷談」として発表するのが最初である。これにはいわゆる被差別集落が実名で登場するのであり、昭和5年（1930）6月刊の『古代研究』民俗学篇第二（大岡山書店、『折口信夫全集』2所収）では全24話を掲載せず、15話だけを収録している。

これは「三郷巷談」という題名からうかがえるように、大阪三郷を中心とする地域での伝承を書き綴ったもので、中には幼少期から聞き慣らされていたこともあろうが、現地での聞き書きを行っていると思われる箇所もある（小川 2009: 10-28）。折口のフィールドワークへの入りは、生まれ故郷である大阪という都市からといえるが、「三郷巷談」の中には造形物や造形伝承にかかわるような話題は含まれていない。

折口のフィールドワークは、大正5年（1916）1月には神奈川県の小田原に武田祐吉を訪ねながら行った道祖神祭り調査、同年8月の王子田楽見学、大正7年（1918）9月の鹿児島県大隅半島から宮崎県での調査（折口 1918<1996: 362-364>）などもあるが、目的をもった意図的なフィールドワークで、記録（調査手帖、写真など）を残している最初のもものは、大正9年（1920）7月17日から7月25日までの、現在の岐阜県恵那市から長野県阿南町、天竜村、静岡県浜松市天竜区水窪町などを経て静岡市まで歩き通した民俗探訪で、「信州探訪手帖」（折口 1998: 205-232）がある。翌大正10年（1921）7月中旬から8月下旬まで沖縄本島を中心とした沖縄、そしてその足で壱岐へ渡り、8月23日から9月中旬まで調査を行う。大正12年（1923）には7月18日に東京を出て、沖縄本島と石垣島などで調査し、9月1日に門司に帰着。大正13年（1924）8月には再び壱岐へ行って講演と調査を行っている。

その後、沖縄には昭和10年（1935）12月から翌年1月まで行き、民俗探訪などを行うのであるが、折口の調査記録は、大正期の信州探訪、2度の沖縄探訪、壱岐探訪が主なものであり、昭和になってからのフィールドワークではほとんど記録を残していない。記録には



前述の「信州探訪手帖」と大正 10 年 (1921) の「沖縄探訪手帖」(折口 1997a: 101-154)、大正 12 年 (1923) の「沖縄探訪記」(折口 1997b: 155-204)、壱岐探訪の記録である「壱岐の水」(折口 1929b<1997: 219-230>)、「壱岐民間伝承探訪記」(折口 1929・30<1997: 231-290) などがある。

これらの記録には、現地で目にした事象をスケッチしたり、写真に撮ったり、あるいは図化したりしており、言葉では表しきれない造形物や造形伝承がいくつも含まれている。そのすべてを紹介しないが、大正 9 年 (1920) の「信州探訪手帖」には、歩きながらの旅中見聞した護符、絵馬、石塔・石碑、削り掛け、家の間取り、囲炉裏の座と名称、ニューギ、草でつくった宝、石造の道祖神や不動、地蔵などをスケッチするとともに、その場の状況などを手帖にメモしている。



写真 2 「信州探訪手帖」日吉の図



写真 3 「信州探訪手帖」向市場道祖神図



写真 4 現在の向市場・道祖神像 (小川撮影)

写真 2 は現在の長野県阿南町日吉で見た光景で、この光景を手帖に「前の川をこえて山に上ると蚕玉大神と書いた石がある。大正五年四月為御大典建之とある。小さな木の枝に繭が沢山かけてある」「日吉の真上は馬頭 庚申 こだま と並んでいる。庚申だけが堂がある。堂の中には、向方の石工が掘つた三十三体が並べてある。庚申様は新しい様式で頗拙である。絵馬がある張り紙の願書がある。萱の様なものゝ根元を輪に結んだものも三本ほどあつた」と記している。写真 3 は浜松市天竜区水窪町向市場の道祖神を描いた図で、手帖には「高橋といふ橋をこえるとその袂に(向市場側)四五尺の地蔵様が小屋根の下に居られる。其脇に馬頭尊が沢山あるうしろに山伏し形の頭巾着た偶像像がある。道祖神に違ひない。よく見ると、交歓の像である」とある(折口 1998: 214・222-223)。図示したものの手帖への説明をあげると切りがないが、このように目に映ずる造形物をいくつも図化して様子を手



帖に記しているのである

大正10年(1921)「沖縄探訪手帖」、大正12年(1923)「沖縄探訪記」も、見聞したものを文章で記すだけではなく図化したり、これらの時には写真撮影を行ったりしている。「沖縄探訪手帖」には、津堅島で写真5のように民家をスケッチし、その間取り図がある。見てわかるようにスケッチと間取り図は、採寸はないが、適正な縮尺ができて見えるように見える。折口は大正10年(1921)の探訪旅行からカメラを持って歩いていて、昭和10・

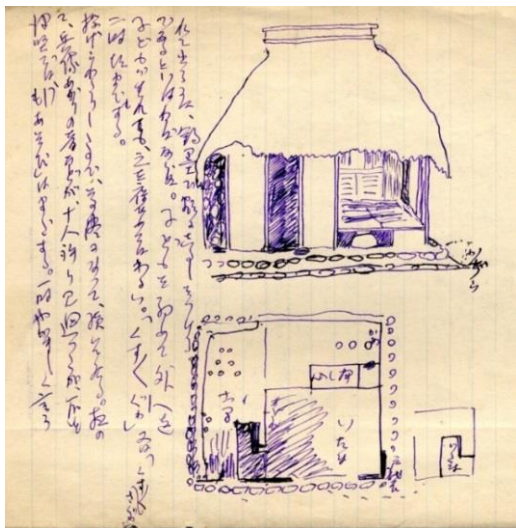


写真5 津堅島の民家スケッチと間取り図

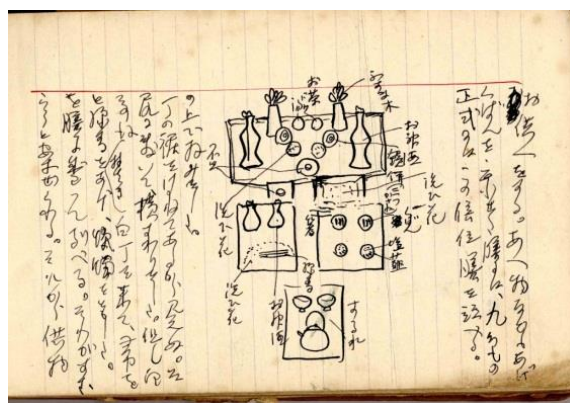


写真6 石垣島・名蔵御嶽への供物図



写真7 石垣島・名蔵御嶽への供物



写真8 首里・三平等殿内の祭壇

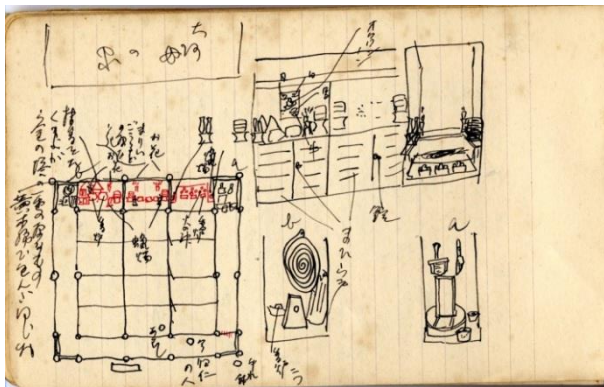


写真9 首里・三平等殿内の図

11年(1935・36)の沖縄探訪も含めると沖縄・八重山については多くの写真が残されていて(小川 2004a: 131-142)、図と写真を組み合わせて記録を行っている場合もある。

写真6と9は「沖縄探訪記」に記された図であるが、これらとはともに対応する写真が残されている。写真5の図は「沖縄探訪手帖」では、津堅島での探訪記録の最後にあって文章記録には説明はないが、民家の間取り図には、中に「土間」「かめ」など若干の注記をし、家屋周りには雨だれ石と思われる配石まで描き込んでいる。写真6と7は大正12年(1923)8月25日に名藏の司で大川に住んでいる「黒島なび」の案内で名藏大嶽に行った時のものである。「沖縄探訪記」には、司は「頭に乘せて来た風呂敷包みの供物」をひろげ、「供物を膳に盛って列べる。それがすむと線香を焚きあげ、蠟燭をともした。その後白丁を着て、箒を尻に敷いて、横すわりをした。但白丁の裾をはねてあるから見えぬ。その上で拝みをした。正式にはこの倍位膳を並べる。くぼんを乗せた膳には、九色のお供へをする。あへ物などもあげるのである。くぼんの肴は焼く。生はあげない。牛をあげる。牛は一二寸位づゝに切つて立てかけて、ばなをかける。豚はあげない」(折口 1997b: 199-200)と記しているが、図には供物に個別の説明を入れている。写真を撮っただけではなく、その場を丹念に図化しているのである。この場面については、供物をはさんで座る2人の司が拝んでいるところのスケッチと写真もある。

写真8、9は石垣島に行く前に首里の三平等殿内に行った時のもので、「沖縄探訪記」には「今日、川平氏に頼んで、末吉氏・島袋氏と四人連れで、天龍寺趾の三比等殿内を一つにした三殿内へ行つた」「大阿母しられの家は真うしろにある」「香炉は青磁色の焼き物に金のもやうのあるもの。以前のは、右側の籠の中に二つほど入れてあつた。深い緑色の物であつた、と川平氏いふ」(折口 1997b: 189-190)などの記録をしているが、これも殿内の祭壇などには多くのメモが入っているし、a、bと位置を記してそこにあるものを別に図示している。

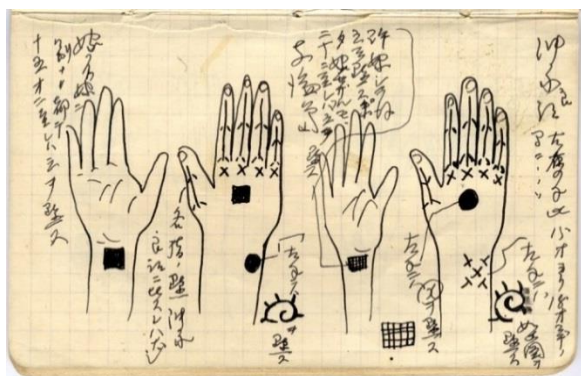


写真10 「針突」の図 大正12年8月

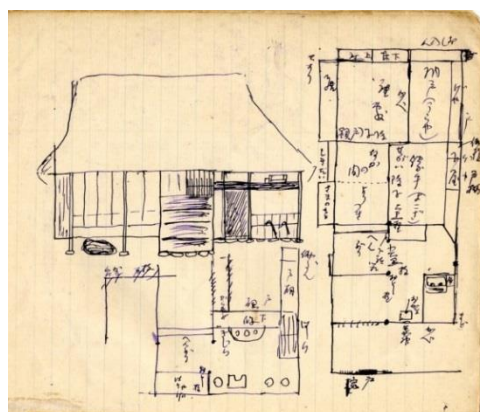


写真11 壱岐の民家

「沖縄探訪記」では、現在の糸満市兼城での聞き書きの後に「童謡」「成女式」と項目を立て、「成女式」のところで「はぢ」の説明をし、左右の手の針突を図示しているが、写真10は、その下書きと思われる図である。折口の「沖縄探訪記」は、現場では別の手帖にメモや図を書き、これと記憶をもとにして書き整えられたものである。こうした下書きがいくつか残されている。この図でも針突の紋様などに注記をいれていて、実際の女性の針突を見ながらスケッチと説明を書いたのではないかと思う。写真11は壱岐の民家図で、これも壱岐での調査ノートに記されたもので、「壱岐の水」「壱岐民間伝承探訪記」にはこうしたスケッチなどは入っていない。壱岐の民家も正面からのスケッチと間取り図を描き、間取り図には部屋名などを書き込んでいる。

もう一つだけ折口のフィールドワークをあげておくと、昭和5年(1930)10月には國學院大學と慶応大学の学生などを連れて、現在の長野県阿南町新野で村落調査を行っている。これは雪祭りを伝えるムラの実生活と民俗伝承を幅広く捉えることで、この祭りの背景を明らかにすることが目的だった。この時にも多くの写真を撮り、その写真と学生たちが作成した稿本が残されている(小川 2004b: 59-105; 松本 2004: 107-192)。

次の写真はこの調査時のものである。折口自身の撮影ではないと思われるが、調査は折口の指導によって行われていて、折口の指示によって撮られた可能性が高い。



写真12 新野村落調査時の農具写真





写真 13 新野村落調査時の写真（中央が折口信夫）

写真 12 は鋤、万能、田下駄、馬鋤、斧などの集合写真であり、写真 13 は神社の、おそらく御神体として祀られる 3 本の幣束を撮ったものである。この調査では、学生がまとめた稿本に折口が朱を入れているが、この稿本の章立ては、1 経済状況、2 家屋調査、3 村落組織、4 行事伝承、5 口頭伝承、6 物的伝承となっていて、物的伝承は「造形の方面」「呪ひの方面」「玩具に属するもの」「農具其他職業用具」「地物・記念物」「記録類（歴史）」「着物・食物」をあげている（松本 2004: 116-117）。

折口が造形伝承や造形物に対して、民俗採訪、フィールドワークの現場でどのように向き合い、記録を行ったのかの一部を紹介してきた。もちろん折口が関心をいただいた民間伝承、民俗情報はこれだけではないが、対象に向き合う態度は極めて客観的であったのがわかる。ここに例示しただけの調査記録からも、造形伝承や造形物に対しては、言説ではなくスケッチや図、写真による記録を優先していることがそのことを如実に示している。

折口信夫という詩人的な直感、文化的な現実との乖離など、その論理構築にはさまざまな批判や揶揄があるが、ここで示したように、こうした謂いはあてはまらない。折口は事実を尊重し理解しようとする研究者だったのである。ただ造形伝承や造形物に関しては、それ自体の形や構造などに終始するという普通の研究にとどまるものではなかった。前述のようにそのものの機能や形象を軸にアナログカルな思考によって、さまざまな造形や造形物を結びつけ、そこに底流する観念とか文化原理を見出し、この観念や文化原理のもとで造形や造形物が時系列上にどのように展開しているのかを明らかにしようとしている。

こうした思索の基底に、ここに紹介した実地での造形伝承や造形物の観察と記録があったのである。その観察と記録は、目に映ずる情景を短歌に詠むことと不可分の関係にあったと思うが、関連づけられる造形や造形物に通底する文化原理の発見という問題関心は、「澁澤敬三の民具研究論」でのべた澁澤の民具への文化構造論的な関心と隔絶するものではないのではなかろうか。澁澤は、自らの研究である『日本魚名の研究』（澁澤 1959）などでわかるように、ものごとを分類して考えるというタクソノミカル（taxonomical）な思考を持った人物で、折口の思考性向とは異なるが、何を問題とするかという学問的感性は比較的近

かったのではないかとも思える。

本稿の目的とした、折口信夫の「造形伝承」論の内容、折口のモノへの視点とそこからの発想のあり方を明らかにすることは、ある程度はできたと思うが、造形や造形物についてのアナロジカルな研究法が、折口を離れてどこまで普遍化できるかは今後の課題である。

## 参考文献

アチック・ミュージアム

1936 『アチックミュージアムノート第7 民具蒐集調査要目』、アチック・ミュージアム。

礒貝 勇

1969 「あしな研究のころ (一)」『民具マンスリー』2巻2号: 1-2。

大西 秀之

2014 『技術と身体民族誌—フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸』、昭和堂。

チャーロット・ソフィア・バーン (編)

1927 『THE HANDBOOK OF FOLKLORE 英国民俗学協会公刊 民俗学概論』、岡正雄訳、岡書院。

小川 直之

1991 「民具・技術論」、日本民俗研究大系編集委員会 (編) 『日本民俗研究大系』第一巻方法論、pp.335-353、國學院大學。

2004a 「折口信夫の沖縄写真」國學院大學21世紀COEプログラム (編・刊) 『日本における神観念の形成とその比較文化論的研究』研究報告Ⅱ 神を迎える』、pp.131-142。

2004b 「折口信夫の新野調査と写真」『折口博士記念古代研究所紀要』第七輯: 59-105。

2005 「神去来観念と依代論の再検討—「髯籠の話」を読む—」、小川直之 (編) 『折口信夫・釋迢空—その人と学問—』、pp.361-392、おうふう。

2009 「折口信夫「三郷巷談」の意趣」『口承文芸研究』第32号: 10-28。

2014a 「「依代」の比較研究」、神奈川大学国際常民文化研究機構 (編・刊) 『国際常民文化研究叢書7 アジア祭祀芸能の比較研究』、pp.349-368。

2014b 「折口信夫の民俗探訪」『現代思想』<五月臨時増刊号>第42巻第7号: 199-211。

折口 信夫

1915・16 「髯籠の話」『郷土研究』第3巻2・3号、第4巻9号 (『古代研究』民俗学篇第一所収、1929年4月、大岡山書店、折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』2所収、pp.176-202、1995年、中央公論社)。

1918 「日向通信」『土俗と伝説』1巻3号 (折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』17所収、pp.362-364、1996年、中央公論社) (伊勢清志の名前で発表)。

1929a 「国文学の発生 (第三稿)」『古代研究』国文学篇、大岡山書店 (折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』1所収、pp.11-66、1995年、中央公論社)。

1929b 「壱岐の水」『民俗学』1巻2号 (折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』18

- 所収、pp.219-230、1997年、中央公論社)。
- 1929・30 「老岐民間伝承探訪記」『民俗学』1巻3～6号、第2巻2～4号(折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』18所収、pp.231-290、1997年、中央公論社)。
- 1930a 「はちまきの話」『古代研究』民俗学篇第二、大岡山書店(折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』3所収、pp.19-26、1995年、中央公論社)。
- 1930b 澁澤敬三宛書簡(書簡130、折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』34所収、pp.137-138、1998年、中央公論社)。
- 1931 「民間伝承蒐集事項目安」『民俗学』第3巻第1号(折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』19所収、pp.315-331、1996年、中央公論社)。
- 1934 「民俗学」『日本文学大辞典』第3巻、新潮社(折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』19所収、pp.158-178、1996年、中央公論社)。
- 1938 「国語と民俗学」『愛知教育』第609・610・611号(折口信夫刊行会(編)『折口信夫全集』12所収、pp.245-302、1996年、中央公論社)。
- 1971a 「民間伝承学講義」、折口博士記念古代研究所(編)『折口信夫全集 ノート編』第7巻、pp.11-64、中央公論社。
- 1971b 「民俗学への導き」、折口博士記念古代研究所(編)『折口信夫全集 ノート編』第7巻、pp.65-97、中央公論社。
- 1971c 「造形伝承」、折口博士記念古代研究所(編)『折口信夫全集 ノート編』第7巻、pp.395-481、中央公論社。
- 1972 「芸能伝承の話」、折口博士記念古代研究所(編)『折口信夫全集ノート編』第6巻、pp.72-172、中央公論社。
- 1997a 「沖縄探訪手帖」、折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』18、pp.101-154、中央公論社。
- 1997b 「沖縄探訪記」、折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』18、pp.155-204、中央公論社。
- 1998 「信州探訪手帖」、折口信夫全集刊行会(編)『折口信夫全集』35、pp.205-232、中央公論社。

刈田 均

- 2003 「奥三河への旅」、横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所(編)『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問—』、pp.36-39、横浜市歴史博物館(「原田清日記」の該当箇所が写真で掲載されている)。

後藤 明

- 2011 「民具研究の視座としての *chaîne opératoire* 論から物質的関与論への展開」『神奈川大学国際常民文化機構年報』2: 201-218。

笹原 亮二

- 2014 「造形伝承と造り物—ハレのかたちに対する民俗学の視角を巡って—」、福原敏男・笹原亮二(編)『造り物の文化史 歴史・民俗・多様性』、pp.67-93、勉誠出版。

澁澤 敬三

- 1933 『祭魚洞雑録』、郷土研究社(『澁澤敬三著作集』第一巻所収、pp.11-18、1992年、平凡社)

- 1935 「アチック根元記(二)」『アチック・マンズリー』第2号:1(「祭魚洞生」の名で執筆)。
- 1957 「なつかしい折口さん」『折口信夫全集月報』第30号:1-2。(これは『澁澤敬三著作集』第五卷(一九九三年、平凡社)に「折口信夫について」という題名でも収録されているが、ごく僅かに文章に異なる部分がある)。
- 1959 『日本魚名の研究』、角川書店(『澁澤敬三著作集』第二卷所収、平凡社、1992年)。  
祖父江 孝夫・大給 近達・中村 俊亀智・大塚 和義
- 1978 「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』3巻2号:280-336。
- 田辺 悟
- 2014 『民具学の歴史と方法』、慶友社。
- 中村 たかを
- 1981 『日本の民具』、弘文堂。
- 原田 清
- 1931 「設樂の發刊について」『設樂』創刊号(伊藤良吉・岡田松三郎・木立英世・永江土岐次・夏目一平(編)『設樂』所収、pp.9-11、1974年、愛知県郷土資料刊行会)。
- 早川 孝太郎
- 1936 「一つの回顧」『アチック・マンズリー』第9号:33-34。(『アチック・マンズリー』は、第2号から第43号までページ数が通し番号でふられているため33頁となるが、第9号としては1・2頁である)。
- 松本 博明
- 2004 「折口信夫・新野村落調査ノート」『折口博士記念古代研究所紀要』第七輯:107-192。
- 宮本 常一
- 1979 『民具学の提唱』、未來社。
- 和田 正洲
- 1984 「造形伝承論」、日本民俗研究大系編集委員会(編)『日本民俗研究大系』第五巻造形伝承、pp.7-35、國學院大學。

#### 【附記】

- 1、本稿に掲載した図版・写真ならびにその原版は、ことわりのない限り、國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵であり、同研究所からの提供による。
- 2、折口信夫の著作については、初出の年次を基準にしたが、ページ数表記については、現在、その初出誌を見るのが困難なものが多いので、その著作が収録されている『折口信夫全集』のページ数を<>内に明記した。澁澤敬三の著作についても、一部を同様に『澁澤敬三著作集』のページ数で記した。

#### Keywords

ORIKUCHI Shinobu, Formative Tradition, SHIBUSAWA Keizo, Folklore, Study for MINGU